

〈声〉の採集者列伝
聞き手たちの時代

丸山 久子

聴く力

—丸山久子の昔話調査—

山田 巖子

はじめに

文学を読むことを知らず、耳でしか言葉を覚えなかつた人々からの日本の考え方、物の言い方をもう少し調べることをこれから女の人の仕事にしてはどうでしょうか。せめて昔話の中から彼等と同じ立場に入って物を考える様な習慣をつけるようにしてみたらどうかと思うのです。⁽¹⁾

柳田國男は、一九五五年（昭和三〇）十月一六日に女性民俗研究会で「昔話の研究について」と題する話をしている。この話題は、丸山久子の佐渡国仲の調査と、田畑英勝の奄美大島の調査を受け、戦争で断絶していた昔話調査が再開されたことを評価して選ばれたものであった。

この講話の中で、柳田は先の提言をしたあと、笠地蔵の昔話の例を上げ、昔話の「お婆さん」のことが「平民の心をよく

表している」と述べている。その理由として「話し手が子供に話をしてやる時に、自然そのお婆さんの気持ちになつてもの言うからなのです」と語っている。ここで柳田は、自分が聞き覚えた話に自分の心情を「託して語る」という常民の自己表現の問題と、語り手が登場人物に「なりきつて語る」という昔話の語り方の問題に触れている。

柳田は昔話の語り手の性別については触れていないものの、昔話の登場人物を「お婆さん」としているのは、暗黙のうちに語り手に女性を想定していたと考えられる。昔話の登場人物の女性、その女性になりかわつて語る女性、その昔話を聞く女性採集者、といった「声による女性のつらなり」といったものをイメージしていたのではないか。

柳田は女性の歴史の中でも「文芸の管理」を重要なものとみなしていた。⁽²⁾ 柳田の学問の特徴は「当事者の問題を当事者が考える」という点にあった。「常民」による「常民の歴史の研究」を「常民」の現在と未来に活かすことを主張する柳田が、「女性」

の問題を「女性」に、と考へても不思議ではなかった。⁽³⁾昔話の登場人物に「なりきって語る」女性と「同じ立場に立って」物考へる女性、そのどちらにも共通するものとして柳田が評価し、期待していたのは、女性の「共感能力」ではなかったか。

ただここで立ち止まっておかなければならないのは、それが、「習慣をつける」という表現に表れているように、女性に生来備わったものというよりは、意識的な訓練によって獲得されるものと捉えていたことがうかがえる点である。柳田が女性に「共感能力」を期待したのは、それが女性の方により多く求められる能力だったからであろう。生育の過程で女性は周りから「共感」を期待されることで、男性よりも豊かにその力を養ってくるものだと柳田は考へていたのではないか。

丸山は戦後、昔話の研究を「これからの仕事」とした。丸山の仕事は「昔話」だけに限られるものではないが、今、丸山の仕事の原点とそれによって昔話研究の歴史に新たに加えたものについて述べてみたい。

一 民俗学への使命感

『女性と経験』二七号「特集 丸山久子の生きた道」〔女性民俗研究会 二〇〇二〕によって、私たちは丸山の生涯をたどることができる。丸山は一九〇九年（明治四二）に長野県東筑摩郡笹賀村神戸（現松本市笹賀）に、丸山家の長女として生ま

れている。丸山が柳田を直接に知るのは、一九三八年（昭和一二）八月に國學院大学で行われた柳田の講演「国語の将来」を聴いたのが最初である。⁽⁴⁾

丸山は、一九三九年（昭和一四）頃から柳田邸で行われていた木曜会に参加し、また一九三八年頃から瀬川清子と伊藤（山口）最子の開いていた読書会に参加するようになる。⁽⁵⁾木曜会は一九四四年（昭和一九）に戦局の悪化のために中断、終戦までは木曜会の日が柳田との面会日、会員相互が連絡を取り合う日となっていた。

一九四五年（昭和二〇）八月一二日、柳田は、自宅の会が終わって残っていた四名に敗戦の事実を告げる。当日の会の参加者は八名で、残っていた四名とは、和歌森太郎、堀一郎、池田弘子、丸山久子であった。丸山は筑摩書房の『定本柳田国男集』第二七卷の「しおり」に当時の自身の日記を引用して次のように記している〔丸山 一九七〇〕。

席上、先生は、今日のニュースをお話しになった。ポツダム宣言受諾決定のこと、ただし国体と天皇主権だけは認めるという条件付き。…略…この重大な発表は今夜、あるいは明日中に大詔をもって発表されることになるであろうということ、などを柳田先生は悲痛な面持で語られたのであった。そしてこれはいまのところこの部屋限りの話だ、とつけ加えられ、さらには私達（池田弘子と丸山久子…引用者注）二人

の方に向って、これから大いに働かなければならぬこと、事実を述べることはどんな場合にも許されなければならぬ。い筈だから、民俗学をやる者の真剣に働く時だ、とさとされた。

丸山久子と神奈川県藤沢市の口承文芸調査をともし、生前交流の深かった中島恵子は丸山を「踏み込むことのできない何かを、うちに秘めていた」と回想している（中島 二〇〇二）。その「何か」を「人間として生きるうえで」の信仰、そして、柳田国男との出会いにより得た民俗学研究者としての自覚と熱意、女性の先駆者としての使命感、それを地域の中に役立ててゆかねばならぬというおもい」と推測している。

中島によれば、丸山がカトリックの信者となつたのは一九四四年、戦争末期の頃であるという。丸山がカトリックの信仰を持っていたことは、一九八六年に丸山が逝去し、その「お別れの会」で初めて知らされたという。戦後の丸山の活動を支えた信念や使命感といったものは、この時期に培われたものが大きかったのではないか。この時期、丸山が足繁く柳田邸を訪問し、柳田の著作の清書を担っていたことは、柳田の『灰焼日記』から読みとれる。また、男性の研究者たちが戦場へと招集される中、丸山を始めとする女性の民俗学徒たちが、この時期の柳田を支えていたことも読みとれよう。

二 「声」の採集

丸山は、「昔話のかきりない魅力にとりつかれ」たのは戦時中に柳田の『日本昔話名彙』の編集の手伝いをしたことがきっかけであったと記している（丸山 一九五三）。「長かった戦争が終わったとき、もう昔話などを本格的に語る人は居ないだろうという人は多かったが、それでもなんとかして昔話をこの耳で書いてみたいという執心」から陸奥二戸の佐藤良裕氏に昔話の語り手を尋ねる便りを出したことを回想している。

一九五四年（昭和二九）に丸山は、「憧れにも似た気持ち」を抱いて佐渡に向かった。この時の様子は、『佐渡国仲の昔話』の中の「岩井サキ嬸とのめぐりあい」に詳しい（丸山 一九五一）。八月一六日から一週間余のこの最初の訪問では、柳田の紹介のあった本間雅彦氏に世話になり、儀礼や行事の調査をして帰京した。十月二二日に再び佐渡に渡り、本間氏の夫人から紹介された岩井サキ嬸から十月二八日、二九日の二日間昔話を聞いた。この調査は、日本で初めて録音機という道具を用いた昔話調査でもあった。初期の頃のこの重い道具は、本間氏が上京した折りに柳田が本間氏に託したものであった。

昔話の音声の保存、再生を可能にしたこの道具は、速記などの技術を持たない者に、昔話のあらすじや話型とは別の側面から昔話を捉えさせることを可能にした。丸山はまず、話し手の知っている五二の昔話を一通り聞いてから、要点を記録し、そ

の中から三〇話を選んで再び語ってもらい、それを録音した。本間夫妻は、機械の操作、方言の通訳、話への相づちなど全面的に調査に協力した。佐渡の昔話の特徴である「サーソ」という相づちは昔話の語りとともに『佐渡国仲の昔話』付録のソノシートに収録されている。サキ媼は、「いい年をした者が、『その次は？ そうして？』と催促するのがおかしくて」たまたまなかったという。新しい道具を間に置いているにも関わらず、話し手がリラククスして昔話を語るという幸運な調査の風景を、丸山はのびやかな筆致で伝えている。

丸山のこの仕事は録音機という道具の出現によって、異郷者の昔話調査が容易になったことも示しているよう。慎重な丸山はまず、話し手の知る昔話を一通り知ってから録音に入ったが、この道具は「意味」を保留にしたまま昔話を聴くことを可能にした。異郷人が、まず「音」の総体として「昔話」と出会い、のちに郷土人の協力を得て「意味」と出会う、ということを書き能にしたのである。

丸山は、音声の文字化にあたって、方言のままテープを書き起こし、そのままでは理解できない方言の単語には注をつけ、後に標準語の意味をつけるというスタイルを採った。このスタイルは、意味不明のことが混じる昔話を、話例のあとの注を頼りに読み解いていくという読み方を読者に強いることになる。しかし注を見ないで読みすすめても、だいたいの意味はとることができると。そこで意味がとれないところを想像して読み

すすめるという読み方も可能である。

方言の意味が分からないまま、音として記載されているところもある。例えば、「ヤーしやみんすけ髪の毛をこうさげて」「みんなして大勢こずいすりゃあ」という記述があり、「ヤーしみんすけ」「こずいすりゃあ」に注の番号が付されている。後を見るに「意味不詳」と記されている。

このやや不自由な読み方は、子どもがことは覚えていく段階の問題などと考えあわせると興味深い。子どもは意味がすべて分かって昔話を聴くのではない。まずリズムとして昔話を聴き、「意味不明」の箇所も、さして気にとめなかつたり、想像で補ったりして聴いているのである。

丸山は音の表記に注意を払っている。伸ばす音については「ー」の記号と平仮名の「あ」と「あ」、「え」と「え」の表記を使い分けている。例えば「らちやかんさけえ」と「ふるめえあるんださけえ」、「ふうろかあいらんか」と「ちゃーんと」(傍点筆者)など、表記を変えることで伸ばす長さの微妙な加減を読者に知らせようとする。

擬声語、擬態語も平仮名とカタカナを使い分け、やわらかい音とかたい音の区別をしている。単語をなるべく正確に、語った通り何度でも表記する方法は、読者を音の面白さに引き込む。「やさやさ」と死人を吊った「にやぐにやぐにやぐ、にやぐにやぐにやぐと川のぐるり中ねこだちが来て」「ぎゃあしんぎゃしん」(大きな蛙の鳴き声)「ぎゃしぎゃし」(小さな蛙の鳴き声)

など、形容されるものと形容する音の不思議な結びつきに、読者を立ち止まらせる。

丸山は、「凡例」で佐渡方言のDとRの音の混同とOとUの混同に注意を向けている。前者はダゼヅデドの音がラリルレロに変われることをひきおこす。例えば「何でももつてもんねえもんださけえ」は「何れももつてもんねえもんらさけえ」となる。丸山はこういう時に漢字を適当に散らして「何れも持つて〔行〕く物無えもんらさけえ」などとして意味を知らせるのではなく、平仮名で表記して読者に摩訶不思議な聴覚の体験をさせようとする。

文字に記載された音は、読者が何度も確認することが可能であるから、編者が注意しなくても例えば「にようにようさん（和尚さん）」「きもんがねえさけえにゃあ（着物がなないので）」「やんびゅう（ていねいに）」「しよのんで（ねたんで）」「らちやかん（らちがあかない）」などの字面を追って開拗音の多さを読者が勝手に悟るということも起こってくる。

『佐渡国仲の昔話』の収められた三弥井書店の「昔話研究資料叢書」シリーズは巻末にカタカナ表記の昔話を載せ、方言の解説を付す。本書にも都竹通年の「新潟県佐渡畑野方言資料」が付されている。この表記を読むとカタカナは、音を体験させるだけであることが分かる。意味と純粹な音の混じりあう聴覚体験（意味の認知度に濃淡がある聴覚体験、と言い換えてもよい）には、平仮名、カタカナ、漢字、記号を駆使した、本文の

表記が最も適切であることを確認させてくれる。

丸山は、自身の開拓したこの音と意味、声と文字の沃野にはそれほどの執着を示さずに終わる。その後の昔話研究の趨勢の中心となる、語り手の「個人史」へと関心を向けることもなかった。丸山のその後の興味はこの時、昔話の資料に付した「昔話の背景」の方に向かう。丸山は佐渡国仲の昔話にこの地域の生活史の聞き取りの成果を付している。昔話を昔話だけで完結させる話型研究とは違い、生活の総体の中に位置づけ、その中から昔話を聴き、伝えることの意味を問う、新たな「問い」の萌芽であった。

三 耳の教育

丸山は一九四六年（昭和二一）、敗戦の翌年に神奈川県藤沢市の鶴沼海岸に転居する。この居住地でもあり、調査地でもあった藤沢市での経験が、先の「問い」を深めていったと思われる。藤沢市では文化財保護委員として『藤沢市史民俗編』の編集に携わるなど、民俗全般の調査を手がけ、この地の生活史への理解を深めていった。

気候に恵まれ、冬でも仕事のできる地帯である藤沢市は、老人も忙しく立ち働き、ゆつくり昔話を聴いたり聴かせたりといったことはなかったという。都市化も著しく進展し、昔話の調査には厳しい場所であった。しかし、丸山は一九七二年から、

中島恵子とともにこの地の昔話調査を始める。「近代都市化地域の昔話調査の経験」はその試行錯誤の記録である（丸山一九七六a）。質問の仕方を変え、自身には抵抗のある、当時に流通していた「民話」といった用語を用いて聴き手の理解を得ようとするなど、対象にあわせた調査の工夫が続く。中島恵子は「相手の人の話を、話したいことを、まず、できるだけ聴く。急がずに、じつと待って、そこから、昔話のかけらでもすくい上げようというのが、基本的な採集の方針であった」（中島二〇〇二）と記している。このような経験を積み重ねる中で、丸山らは「共感」に根ざした「聴く力」を養っていたといえる。また、ここで、丸山は調査経験に基づいて「問い」を立て直す。伝承の薄い地域に残っている昔話はなぜ、どのような場面で残っているのか、と。そこで、生業や行事などの生活経験と結びつき、リアリティを保ち続ける昔話のあり方に気づいていく。虚構の物語を日常の生活が支えている、というあり方である。

ここで考え合わせなければならぬのは、丸山が柳田から『分類児童語彙』の下巻の刊行を託されていたことである。丸山は『分類児童語彙』の原稿の整理と清書、加筆を通して、柳田の発想を自己のものとしていったと考えられる。この書は、ことを投げ掛けられることによって、子どもが自分の耳を養い、言葉を覚え、活動圏を徐々に拡大していくさまを感じ取らせるように、子どもが発達段階に応じて、語彙を配置したもので

あった。丸山にはまず、「子どもの言語生活の総体」という発想が身につけていたといえるのではないか。だからこそ、完成された「昔話」が聴けない、という事態に陥っても、大人が子どもに投げ掛けたことばに耳をすませ、その場面を注意深く聴き取るうとしたのではないだろうか。

例えば、丸山は藤沢に残っている「猫のおどり」という短い昔話に注意を向ける。稲刈りが終わって粃すりをする日には、作業が深夜に及ぶこともあるので、この日には夜食としてお粥やおじやを食べる習慣がある。「おじやが熱くてやけどして今夜は笛が吹けねえ」と話す猫が登場する「猫のおどり」の昔話は、この作業の記憶と関わりを持つと丸山は推察する。両親がいなくてなかなか寝付けない子どもに祖父母が熱いおじやを食べさせながら語る話としてはうってつけであったろう。また、子どもが食物が熱いという「踊場の猫じゃあるまいし」と親たちが答えた、という記録などは、虚構の物語が日常の中で自在に引用され、生活を彩るものであったことを教えてくれる。「おかしい」もの言いによって子どもを笑わせ、納得させて、その結果が「しつけ」として機能していたことが読みとれる。このように結構の整った昔話に拘泥しない柔軟な姿勢は、昔話研究に新たな資料を加えていった。同時代に横行していた「話が瘦せている」とか「昔話が崩れている」といった、あり得べき「昔話」から発想する表現とは別の姿勢である。

一九七八年の昔話研究懇話会で行われた「昔話と教育」とい

う題の座談会では、丸山は藤沢で「糠埋米埋」の昔話を子供の時に聞いたという老人の話を紹介する〔庵途・丸山・大島・福田 一九七九〕。継母が実子を米の中に、継子を糠の中に入れてたところ、米は冷たいので実子は死に、糠は暖かいので、継子は助かったという継子話である。

マンガクという傾斜した長い篩の上端から、初を流して糠をふるい落とす作業がある。丸山は、その作業の時には、家内で土間に集まって始末しなければならなかったことに触れる。「子供はいきおい、お爺さんお婆さんの膝のあたりに預けられるわけです」という。その老人は、かつてその作業の時に炬端で「糠埋米埋」の話を聞き、その後、土間に降りて米と糠の両方に手を突っ込んだという。丸山はこのような経験が、昔話の登場人物に対して「さぞ冷たかつたろう」と思いを馳せるような契機になり、「それが一つの、ものを言わない教育になるんじゃないかしらんとするわけでございます」と語る。

ここに見られるのは、生活の中で、暮らしに根付いた「物語」を聞き、「物語」と「経験」が結びつくことで深い理解に至る、それとともに「他者」の「経験」に「共感」する能力を養うという、理想的な「国語教育」である。生活の場から切り離されたところで行われる学校の国語教育に対して、生活の中で学ぶ「国語教育」を柳田は「昔の国語教育」と呼び、国語教育の将来に活かすべきであることを説いた。柳田の「国語の将来」に導かれて民俗学に入ってきた丸山の、「国語」に対する深い

洞察に根ざした発言といえよう。

おわりに

丸山久子は、柳田國男が最も信頼していた女性〔鎌田二〇〇二〕として知られ、柳田への献身や、戦後の昔話研究再開の契機となった佐渡の調査のみが強調されるくらいであった。今、丸山の残した仕事を読み直し、「柳田の強い影響下にいた丸山さん」〔野村 二〇〇二〕といった評価には肯んぜない思いが残る。敗戦の経験にこだわり、柳田が昔話研究に託した問題意識を受け継ぐことを目指したところに、丸山の研究の原点があり、それはいたずらな「盲信」とは無縁のものであった。丸山の『こどもとことば』を出版した堺屋図書の芝正夫は丸山の文章を「巧んだところの感じられない、どうにかすると無雑作とささみえる平易な淡々とした文章」と評している〔芝 一九八四〕。丸山の残した文章には、記述する対象よりも作者の自意識が前に出てしまうことを恥じる意識がある。そのような意識の持ち主のみがなし得る仕事があることを、丸山の仕事は教えてくれる。

共感を持って「声」を丁寧聴き、「耳で読む」表記をめざし、生活に根ざした国語の問題として昔話を捉えたこれらの仕事は、「聴く力」の豊かさを、自身で身を持って示したものと見えるのではないか。

注

- (1) 柳田國男「昔話の研究について」『女性と経験』二卷三号 一九五七
- 一九五五年十月一六日の女性民俗研究会での講話をもとに石原綏代が要約したものと
- (2) 柳田國男『女性と民間伝承』(一九三七)ほか。
- (3) 柳田にとつて子どももまた、「考える主体」であった(杉本 一九八八)。子ども向けの読み物は、子どもを「考える主体」として扱った(重信 一九九七)。
- 女性の「聴く力」を信頼した柳田が戦後、「聴く力」を養う国語教育に力を注いだことも忘れてはならない。
- (4) 国語の教員になろうとして勉強していた丸山は柳田の講演を聞き、「自分が今勉強していることは国文学で、国語ではないことにはじめて気がついて大変にびっくりした」と記している(丸山 一九七六b)。鎌田久子は柳田から、丸山が柳田の弟松岡静雄の家塾の受講生であったことを聞いている。静雄の妻や娘とも交流があり、柳田と丸山には民俗学以外の結びつきがあったという(鎌田 二〇〇二)。
- (5) 女性民俗研究会は瀬川・伊藤の読書会から始まったとする説と、昭和一二年の「第三回日本婦人座談会」を契機に、柳田國男の指導の下に集まるようになり、一九四四年の『女の本』発刊の折、女性民俗研究会と名付けられたとす
- る説がある(刀根 二〇〇五)。丸山は初期の頃からの会員で女性民俗研究会の中心的な立場にあった。
- (6) 同様の回想を大島建彦氏からもうかがった。親しくつきあった人々にも立ち入ることのできない領域であったことが分かる。
- (7) 鎌田久子は、戦中、戦後の困難な時期に丸山が献身的な姿勢で柳田の仕事を担ったことを柳田の『炭焼日記』などの資料から掘り起こしている。また、柳田の『日本昔話名彙』や瀬川清子の『祭のはなし』に丸山が果たした役割を記し、抑制の利いた筆致で、それらの書物に丸山の名が記されていないことに疑義を呈している(鎌田 二〇〇二)。
- 『日本昔話名彙』の原稿の整理には池田弘子と丸山久子があたった。
- (8) 『分類児童語彙』は柳田が上巻を一九四九年に刊行し、下巻を柳田の原稿を整理していた丸山に託していた。しかし丸山の生前にはこの本は刊行されず、大藤ゆきが丸山の遺稿を引き継いで一九七九年に上下巻合わせて一冊として国書刊行会から出版されるという経緯があった。

参考文献

庵道巖・丸山久子・大島建彦・福田晃(座談会)『昔話と教育』昔話研究懇話会『昔話―研究と資料―』八号 一九七九 三

弥井書店

大藤ゆき「柳田国男と女の会(女性民俗研究会)(一)―日本

民俗学の側面―」『日本民俗学』二〇八号 一九九六

鎌田久子「柳田国男先生と丸山久子さん―「女性と経験」の生

みの親―」(女性民俗研究会 二〇〇二)

重信幸彦「御伽、童話、民話」久保田淳ほか編『日本文学

史 第一七巻 口承文学2・アイヌ文学』一九九七 岩波書

店

芝正夫「丸山さんの新著『子どもとことば』に関して」『さか

い通信』二号、一九八四 堺屋図書

女性民俗研究会編『女性と経験』復刊一号 一九七六

女性民俗研究会編『女性と経験』二七号「特集 丸山久子の生

きた道」二〇〇二

女性民俗研究会編『女性と経験』三〇号「特集 女の会―先人

の肖像」二〇〇五

杉本仁「新しい教育」(柳田国男研究会 一九八八)

瀬川清子ほか編『女の本―若き友におくる民俗学』一九四六

朝日新聞社

柘植信行「戦時下の学問と生活」(柳田国男研究会 一九八八)

刀根卓代「邂逅―柳田国男と女の会、そして私」(女性民俗研

究会 二〇〇五)

中島恵子「丸山久子さんと歩いて」(女性民俗研究会

二〇〇二)

中島恵子・糸智子・北村澄江「丸山久子の生きた道―一つの年

譜の試み―」(女性民俗研究会 二〇〇二)

野村敬子「丸山久子さんの思い出」(女性民俗研究会

二〇〇二)

野村敬子「女性民俗研究会」野村純一ほか編『柳田国男事典』

一九九八 勉誠社

丸山久子「終戦のころ」『定本柳田国男集 月報二七』一九七〇

年八月 筑摩書房

丸山久子「佐渡国仲の昔話」一九七〇 三弥井書店

丸山久子「陸奥二戸の昔話」一九七三 三弥井書店

丸山久子「近代都市化地域の昔話調査の経験」昔話研究懇話会

編『昔話―研究と資料―』五号 一九七六 a 三弥井書店

丸山久子「女の会と私」(女性民俗研究会 一九七六 b)

丸山久子「子どもとことば」一九八四 堺屋書店

丸山久子・柳田国男「分類児童語彙」一九八九 国書刊行会

柳田国男「国語史 新語篇」一九三六 刀根書房

柳田国男「女性と民間伝承」一九三七 岡書房

柳田国男「国語の将来」一九三九 創元社

柳田国男研究会編『柳田国男伝』一九八八 三一書房

〔付記〕本稿の執筆にあたって大島建彦・中島恵子の両先生に

ご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

(やまだ・いつこ／弘前大学)